



雅楽をやってみた

会員 羽成 守 (28期)

1 日本人なら誰でも聞いたことがありながら、その実態を知らない筆頭が雅楽であろう。事件の依頼者が雅楽の奏者であったというひょんなことから、雅楽を習うことになった。17年も前のことである。

ふつう、3つの管楽器、^{しょう}笙、^{りゅうてき}龍笛、^{ひちりき}篳篥を習うことから始まる。3つともできる人は稀で、どれか一つを選ぶ。

主旋律を篳篥が担当し、龍笛は龍が縦横無尽に駆け巡るように主旋律を装飾する。笙は独特な神々しい音色の重奏音で響き続け、楽曲を途切れさせない。

私は、龍笛、篳篥の奏者が顔を真っ赤にして吹いているのを見て、笙なら吹く、吸うを交互にするだけだから楽だろうと独り合点し、笙を選んだ。

2 笙は17本の竹管を左右6本の指を組み合わせで小さな穴を押え、音を出すという極めて複雑なものである。楽譜は漢字で、十、^げ下、乙、^く工、^び美、一、八、七、^{ほう}几等で表される。ちなみに篳篥と龍笛の楽譜はカタカナと漢字交じりである。

習い始めは、唱歌といって、先生について漢字の楽譜に節を付けて歌う。これは重要な基礎で、龍笛や篳篥の奏者も唱歌をしっかり歌って憶える。

それから笙を吹くのだが、笙は竹の管の先端に青銅製のリードが松脂と蜜蝋を煮詰めたもの（みつろう）で接着してあり、これを椀型の部分（かしら）に差し込んであるので、みつろうを温めてやわらかくしないと、吹いた瞬間にリードがペリッと剥がれて音が出ないことになる。そのため、火ばちや電気コンロで、かしらをくるくる回しながら、全体をゆっくり温めてみつろうをやわらかくする。

ほぼ人肌くらいになってようやく吹くことができる。約30分くらいはかかる。

笙を習い始めて良かったことの一つが、この温める時間であった。気忙しい私にとって、この時間は精神を集中できる大切な時間ともなった。



笙の写真

3 還暦を過ぎた私が、6本指の組み合わせを暗記するため、通勤電車の中でも妙な指の形をして練習した。

吹いて予期したとおりの音が出た瞬間は嬉しかった。そうになると、いろいろな曲が吹きたくなる。私とほぼ同時に龍笛を習い始めた女性は、吹けども音が出ない。龍笛や篳篥は音を出すこと自体が難しい。それに比べ笙は音が出るし、少しの優越を感じていたとき、先生から「楽譜を憶えたようなので、これから表現を勉強しましょう」と言われた。この「表現」が大変であった。抑揚、強弱、無呼吸の吹き続けなどをしっかりと加えたら笙の中だけでの呼吸では空気が足らなくなるのである。まさに笙の中で呼吸困難になるほどで、龍笛や篳篥の初心者に対してもった少しの優越感は、たちまち劣等感となった。

しかし、雅楽をしているときの精神集中、心の平穏は、始める前には予想できなかったものである。しかも、うれしいことに素人が学ぶ雅楽はやはり、年季がものを言う。歳を取れば取るほど確実に上手になれる（ことを信じて）雅楽をやっていると思う。